

ヨーロッパにおける中世的自然観の解明に向けて

—中世百科全書を手がかりに—

鈴木 道也 埼玉大学教育学部社会科教育講座

キーワード：自然観、百科全書、ヴァンサン＝ド＝ボーヴェ、中世ヨーロッパ、
ディープ・エコロジー論

1. はじめに

現在の環境問題において、問題の深刻さに比して解決に向けた取り組みがなかなか進まない理由のひとつとして、その時代的限界が指摘されることがある。すなわち、環境問題は現代社会の構造に完全に組み込まれており、人々の反応が鈍いのは、解決に向けた具体的な活動が現代社会の在り方そのものを突き崩しかねないことを敏感に感じとっているからである、と。

気候変動に関する政府間パネル (IPCC) が公表した最新報告書『第四次評価報告書』は、「20世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇のほとんどは、人為起源の温室効果ガス濃度の観測された増加によってもたらされた可能性が非常に高い」と明記し、地球温暖化が現実のものであること、またその原因が現代社会を作り上げた人間によるものであることを指摘している。¹

こうした理解を前提とした上で、「時代的限界」を乗り越えて問題に取り組もうとした場合、それが現代社会のどの部分と結びつき、どこを変えればいいのか、という点について、論者の主張には大きく二つの流れがあるように思われる。ひとつは、その政治的・経済的下部構造に着目する、いわゆる「社会派エコロジー」の考

え方である。ここでは、経済発展と環境破壊は比例関係にあるとされ、南北問題に象徴される世界経済の著しい不均衡の是正こそ、第一に取り組むべき課題であるとする。

これに対して、社会の精神的・内面的構造に立ち入って分析を加えようとする立場は、「ディープ・エコロジー」と呼ばれている。ディープ・エコロジー論によれば、現代社会と文明の在り方を前提とする限り、環境保護運動の展開には限界があり、問題の本質的な解決のためには、現在の社会システムあるいは文明それ自体の変革が必要である。² 彼らは、現在の地球環境問題は、近代以降人間が自然に対して「誤った」態度をとってきたことに由来すると主張する。自然は「征服すべき対象」ではなく、人間と自然とはそもそも一体であるから、自然の中で自然に支えられて生きる人間という考え方こそ「正しい世界観」である。彼らの主張においては、先進工業国を中心とした経済活動にとどまらず、近代以来の社会にみられる自然への技術的アプローチそのものが祖上にのせられている。

2. 前近代社会の自然観を巡って

ここではひとまずディープ・エコロジー論に

従って、彼らが批判する近現代以前の社会に考察を進めてみたい。いわゆる前近代社会は、「近代以降の時代とは異なって」、彼らが目指すべき「正しさ」を備えた世界であったのだろうか、それとも近代の自然観は、前近代の自然哲学のなかに胚胎していたのであろうか。

近代と、その前段をなす中世ヨーロッパ・キリスト教社会を単純に対比させる伝統的な見方に対しては、すでに多くの批判が寄せられている。カルロス＝スティールの整理によると、近代科学革命と前近代キリスト教思想との間には、次の1)～3)の三つの関係が想定されるという。³

- 1) 後期中世の自然哲学と宇宙論が、新たな科学への道を準備した。
- 2) 中世の自然学と17世紀科学とのあいだには根本的な断絶が存在していた。
- 3) キリスト教はきわめて人間中心的な宗教であり、その宇宙論は、現代の自然に対する技術的アプローチとエコロジカルな危機の歴史的根源であった。

三つ目の考え方によれば、キリスト教は古代の異教的アニミズムを破壊し、人々が自然に寄せる愛着といったものにも無関心で、結果として人間による自然からの搾取を可能にした、ということになる。しかし実際には、これらのうちのひとつに中世の自然観を代表させることは難しい。中世人と自然物との関係について、樺山紘一は次のように指摘する。「キリスト教的世界観においては、自然物と人間のあいだには恩寵と摂理にもとづく価値の懸崖があるとされているが、中世においては、こうした考え方とならんで、自然物と人間をより密接にむすびつけようとする思想が存在していた。それは一方では、ゲルマン・ケルト世界における太古もしくは中世以来はぐくまれてきた人間・自然の親密な連携であり、また他方では新プラトン主義コスモロジーを背景とする人間・自然の饗応関係において現れている。」⁴

したがって、近代の起源を人間中心的なキリ

スト教的自然理解の世俗化と考えるのも、また新しい現代文化の手がかりを前キリスト教的な宗教的信念に求めるのも、いずれも素朴な発想であるといえるだろう。現実はずっと複雑である。しかし他方で、近代的な科学思想がなぜヨーロッパの地から生まれてきたのか、ということとは依然として問われ続けていい。この点に関して興味深いのが、近代科学思想の形成史においてこれまでその役割をほとんど評価されていなかった中世のスコラ学者たちを再評価し、彼らこそ科学革命の先駆者であるとしたピエール＝デュエムの研究である。⁵ またエドワード＝グラントも、当初はデュエムの研究を批判していたが、その後、①ギリシア語文献の翻訳、②大学の発展と、そこでの科学カリキュラムの構築、③キリスト教の世俗的学問への順応、④アリストテレス自然学の変容、の四点が中世に生じたことを理由として、中世科学が科学革命を準備した、と主張するようになった。⁶ スティールの整理に戻るならば、近代と前近代の自然観に関する理解は、上記の1)の方向に一歩踏み出したということになるだろう。

中世科学史の専門家ではないものの、リチャード＝ルーベンスティンは最近のこうした研究動向を踏まえ、『アリストテレスの子どもたち』と題された近年の著作のなかで（邦題は『中世の覚醒—アリストテレス再発見から知の革命へ—』）、科学史における中世科学思想の重要性を説いている。⁷

いずれにせよ、ディーブ・エコロジー論の立場で近代的自然観の意味を論じようとすれば、近代科学革命にいたる長い道程のなかで、間違いなくひとつの里程碑であった中世的自然観そのものが、どのような形で形成されてくるのか、その複雑なプロセスにもう一度注目してみる必要があるように思われる。とはいえ直ちに予想されるように、それは非常に困難な作業である。作業を真摯に進めようとすれば、トマス＝アクィナスの体系的整理を唯一の、また最終的な解として受け入れるのではなく、13世紀の自然

哲学者たちがアリストテレス自然学と出会い、あるいはヘブライやアラブ・イスラームの科学思想に触れ、そしてときには経験主義的な立場からの批判に直面するなかで、どのようにしてキリスト教的自然観を練り上げていったのか、その多様な可能性と具体的な論争の場に立ち入ることが求められるだろう。

以下本稿では、一部の科学史家を除けばこれまであまり注目されてこなかった、13世紀における百科全書の流行という現象に着目し、その基本的性格を確認する作業を通じて、中世人たちの世界観のなかで、自然という存在がどのようなものとして意識されていたのか、いわゆる中世的自然観の位置づけを考えるための手がかりを得たい。方法としては、はじめに13世紀に至る自然学的著作の動向を簡単に紹介した後（3節）、「百科全書の黄金時代」とされる13世紀に生み出された自然学的百科全書をいくつか取り上げ、フォールバイやアルブレヒトの近業を参考にしながら、その構成を分析することとする。（4節）⁸

3. 13世紀における自然学の発展とスコラ学

12世紀のヨーロッパにおいては、いわゆる「シャルトル学派」の思想家たちのなかで、プラトンの宇宙観に基づく自然や社会への積極的な関心が生まれていた。たとえばそれはシャルトルのベルナル（-c.1124）による『プラトン「ティマイオス」注釈』⁹、あるいはシャルトルのティエリ（-c.1150）の『六日間の御業について』、コンシュのギョーム（1080/90-1154/60）が記した『宇宙の哲学』や『ドラクマティコン』などに、その代表的な例を見ることができる。¹⁰

しかしまさにこの時代に、アリストテレス自然思想の受容が始まりつつあった。アリストテレスの論理学的著作については、すでにボエティウス（480-524/525）の訳業を通じて中世初期段階から『範疇論』、『命題論』、『分析論前

書』、『トピカ』、『詭弁論駁論』などが知られていた。その伝統は、アベラール（1079-1142）やヴェネツィアのヤコブス（1090-c.1155）に受け継がれ、ヤコブスによるラテン語翻訳版『分析論後書』の成立を見ている。

他方、自然学的著作の翻訳と思想流入はかなり遅れており、ようやくこの12世紀に、クレモナのゲラルド（c.1114-1187）やスコットランド出身でフリードリヒ二世の側近でもあったマイケル・スコット（1175-1232）らが『形而上学』『魂について』『天体論』『自然学』を紹介したことで、その存在が注目されはじめる。

自然を理性で考えていくというアリストテレスの考え方、自然そのものを合理的に追究してゆくという発想は、これまで想定されていない新しいものであった。¹¹ さらにこうしたアリストテレス的な自然哲学による世界理解は、信仰だけではなく、理性の領域における真理の可能性を指摘するものであった。当然教会は、こうした流れに対して厳しい態度をもつてのぞむこととなる。はやくも1210年には、パリの学生・教師に対し、アリストテレスの『形而上学』『魂について』『自然学』、ならびにその注釈書を読むことが禁止される。さらに1215年には、おなじくパリの学生・教師に対して、アリストテレスの著作に関しては、『論理学』以外の読書を禁じる命令が出されている。しかしブラバンティアのシゲルス（1241-1277-1284）に典型的にみられるように、神学的な動機づけから解放された自律的な「自然学（scientia naturalis）」が生まれるに至り、教会はついにこれを「アヴェロエス主義」（「急進的あるいは異端的アリストテレス主義」とみなして異端視することになるのである。

もともと教会側もアリストテレス思想を排除して是とするのではなく、1216年に認可されたばかりの新しい修道会であるドミニコ会の協力を得て、神学と哲学の調和を図ろうとする。その嚆矢となるのがアルベルトゥス＝マグヌス（c.1193-1280）である。彼は、「われわれが自

然の事物について自然学的方法で議論している時には、神の奇跡を扱うことはわれわれの関心事ではない」と語り、哲学か神学か、という議論をさしあたり脇に置いて、自然に関する経験的知識の意義を強調するとともに、まずはアリストテレスが伝える動植物や鉱物に関する知識の体系化を試みたのである。その結果生み出された膨大な成果は表6に整理した通りである。

その後を受けてヴァンサン＝ド＝ボーヴェが編纂し完成させたのが、中世を代表する百科全書『大いなる鑑』である。ここではアリストテレスの思想を「実用的哲学<philosophis practica>」と位置づけ、その他様々な自然学的著作と合わせ、一定の分類基準に基づいて過去の膨大な知識を収集、分類している。それは、後述するように自然、学問、歴史そして道徳の総合的学問知識体系（スンマ）であり、その総合性において同時代のゴシック建築やポリフォニー音楽との類似性を示している。

そうしたドミニコ会の豊かな営みを、カトリック教会の教義のなかに見事に位置づけたのが、トマス＝アクィナス（1225-1274）の『神学大全』である。彼は神学的・キリスト教的思考のなかギリシア哲学を統合し、神は、原理的には事物の「自然本性的秩序」への介入・変容が可能であるとした。これにより中世哲学ははっきりと神学の下に置かれることになったが、しかしそれは逆説的に、哲学者に自由を、すなわち彼らが蓋然的な諸原理を用いて、偶発的な自然世界について説明する自由を与えることとなった。¹²ここにアリストテレスの自然学はその居場所をみいだす。

しかし13世紀の末から14世紀に入ると、早くもアリストテレス的の科学への疑問が提起されるようになる。たとえばオッカムのウィリアム（c.1285-1347）は、「普遍とは言語の機能に過ぎない」とする唯名論的存在論に基づき、個別的な証明によって自然を観察していくという自然科学的方法ではなく、物理的問題を表現するのに用いる命題と、これらの命題を構成する用語

を分析する、という作業に没頭していく。

またヘンリー＝パーテ（1246-c.1310）やヴィラノーヴァのアルナルドゥス（1238-1311）などは、「普遍的な知識は可能態における知識にすぎない」とし、限定された事物についての限定された知識こそ現実的だと主張する。さらにブラッドウォーディングのトマス（1290-1349）や彼を含むマートン（＝カレッジ）学派などは、物理的問題に対して、言語ではなく数学的分析手法の導入をいち早く試みているのである。¹³

中世的自然観の体系化にあつて最も大きな役割を果たしたのは間違いなくトマスであろう。しかし彼のその成果は、同じドミニコ会士であったアルベルトゥス、そしてヴァンサンの百科全書の著作を基盤として成し遂げられたものであった。そしてこれらの百科全書もまた単独で成立したものではなく、同時代そしてそれ以前に生み出された多くの作品との対話を経て編纂・執筆されていったのである。以下では、中世最大の百科全書である『大いなる鑑』を中心に、12世紀末から13世紀半ばにかけて制作された五つの作品をとりあげ、その基本的性格を確認することとする。

4. 中世百科全書の黄金期としての13世紀

4-1 中世百科全書を巡って

1987年にカンで開催された中世の百科全書に関する国際シンポジウムは、ヴァンサンの『大いなる鑑』をはじめ中世ヨーロッパを代表する百科全書が生み出された1175年から1275年までの百年間を「中世百科全書の黄金時代」と名付け、その歴史的意義を強調した。中世百科全書のはじまりとしては、7世紀の前半にセビリヤのイシドルス（Isidorus Hispalensis/c.560-636）が著した『語源論』<Etymologiae>を挙げることができる。それに続くのは、ラバヌス＝マウルス（Rabanus Maurus/c. 780-856）による9世紀前半成立（842-846）の『事物の本性について』<De rerum naturis>であろう。その後中

世期を通じて、特定の分野に特化した事典、すなわち政治的百科全書、文献学的百科全書、医学的百科全書、経済学的百科全書といったものがそれぞれ何点か制作されている。しかし12世紀後半から13世紀後半にかけての、いわゆる「黄金時代」に数多く制作されたのは、自然界の事物すべてを対象とした一般的百科全書である。

とはいえそれは、この時期の百科事典が均質的なものであることを意味しているわけではない。シンポジウムが明らかにしたのはむしろ、その規模、内容、用途の多様性であった。¹⁴

その後1996年には、オランダのフローニンゲン大学で「古代・オリент・中世・ルネサンス研究 (COMERS: Classical, Oriental, Medieval and Renaissance Studies)」が主催した、中世の百科全書を巡るシンポジウムにおいて、形態や内容に関する分類を当面の課題としてきた段階を踏まえ、研究テーマを中世百科全書の読者、作成の目的とその社会的文化的背景へと発展させていく必要性が示された。

その二年後にテルアビブのパル=イラン大学で開かれた「中世における科学的哲学的ヘブライ百科全書に関する国際会議」では、先の指摘を受けて、“黄金時代”を代表する四全書の基本的性格についての分析がフォルバイによって試みられている。以下、彼の研究に加えて、異なる全書にも着目しているアルブレヒトの研究を参考に、合計五つの全書から、中世百科全書の基本的性格を概観してみたい。

4.2 「黄金時代」の五つの全書

最初に取り上げるのは、アレクサンダー=ネッカム (Alexander Neckam/c.1157-1217) が13世紀初めに完成させた、『事物の本性について、そして「コヘレトの言葉」に関して』<*De naturis rerum et super Ecclesiasten*>である。¹⁵ セント=オーバンズ生まれのアレクサンダーは、セント=オーバンズの修道院を経て大陸に渡り、パリのサン=セヴラン教会で学んだ後、パリ大

学の講師となった。その後1186年にイングランドに戻り、1195年ごろまでセント=オーバンズで講師を務めている。『事物の…』は、このとき、旧約聖書の知恵文学 (諸書) のひとつである『コヘレトの言葉』への注釈として著されたものである。その後彼は1213年にはウースターのサイレンセスター修道院長となり、この地で没し、埋葬されている。

彼はカンタベリーのアンセルムスの思想にいち早く注目したことで知られているが、その学問的関心は広く、現代的な区分に従えば、哲学、医学、自然科学、言語学に関する著作を残している。『事物の…』は、5つの部分から構成され、前半の2部で当時の自然科学的知識に基づいて自然界について、後半3部は「コヘレトの言葉」への注釈となっている。そこでは例えば、当時の船乗りたちが自らの方向を知る術として磁石を用いたコンパス (いわゆる羅針盤) を使用していることに言及するなど、興味深い知見も多数みられるが、その内容は主として徳の在り方に向けられており、これまでの研究のなかでは、自らが教師の任にあったセント=オーバンズ修道院附属学校での講義に際し、一種の教科書として利用されていたのではないかとされている。¹⁶ この著作に関して現存する写本は15点であり (部分含む)、その多くは13世紀中に制作されている。

アレクサンダー=ネッカムには、あわせて<*Speculum Speculationum*>¹⁷ という作品もよく知られている。これは1215年という晩年に執筆が開始され、未完状態であるが、アウグスティヌスの諸著作やペトロス=ロンバルドゥスの『命題集』から多くの神学的問題を取り上げるとともに、その解釈の多くを、アリストテレスやアヴィケンナの思想に依っている。

次は、アルブレヒトが分析の対象としているアルノルドゥス=サクソ (Arnoldus Saxo) の『事物の精華について』である。この作品には、完全なものとしては1220年から1230年頃に制作された写本一点 (Erfurt, WAB, Ampl. oct.77)

しか現存していないが、もしこの年代推定が正しいとすれば、以下にみるパーソロミュー、トマ、ヴァンサンに先行し、アレクサンダー＝ネッカムとともに黄金時代の最初期に作成された百科全書ということになる。¹⁸

全体が5部からなる『事物の精華について』は、第1部と第5部が5つの書を含む一方、第2部から第4部まではそれぞれ10章からなっており、やや変則的な構成をとっている。さらに第3部と第5部は後世の追記であるとされており、最初に同時代の自然科学的知識をまとめた著作を記した後、アレクサンダー＝ネッカムなどと同様に道徳的色彩を施したのではないと思われる。

表1 『事物の精華について』全5部の目次

- | |
|---|
| <p>1. 天国と地上、2. 動物の性質：人間、動物、鳥類、魚類、爬虫類、3. 稀少な石の力
4. 様々な力 5. 徳：悪徳と美德</p> |
|---|

作者であるアルノルドゥスについては、現時点では残念ながらほとんど知られていない。しかし彼にはこの『事物の精華について』以外にも4点ほどの著作が知られており、なかには当時の医学を詳細に紹介した <De causis morborum et figuris simplicibus quoque compositis medicinis> や、あらためて徳について論じた <De iudiciis uirtutum et uitiorum> も存在している。その活動期間から判断して、おそらくアルベルトゥス＝マグヌスらドミニコ会士との交流はなかったとみられるが、13世紀初めの段階で、異なる学問的系譜のなかにアリストテレスをはじめとするギリシア語文献を活用していた知識人がいることは、特筆に値すると思われる。

次に取り上げるのは、パーソロミュー＝オブ＝イングランド（バルトロマエウス＝アングリクス）(Bartholomew of England/Bartholomeus Anglicus/c.1203-1272) の『事物の性質について』

<De proprietatibus rerum> (1235-) である。彼はイングランド出身のフランシスコ修道会に所属する学者であったが、いわゆるオックスフォード学派を代表するロバート＝グロステストの指導のもとオックスフォードで学んだ後、フランスに渡っている。

その後1224年からサン・ドニの修道会で講義を担当したほか、パリ大学で論理学の教授を務めたことが確認されている。その後は請われて専らカトリック教会の聖職者として活躍した。1231年にはマグデブルクでフランシスコ会士に神学を教えるべくドイツに派遣される。その後1247年までカトリック教会のオーストリア管区長、1255年にはボヘミア管区長に任命されている。管轄のなかにはポーランドも含まれ、ボレスラウ公とクラカウの聖堂参事会との間の紛争なども仲裁している。1256年、教皇アレクサンデル四世は、彼をカルパチア地方北部の教皇特使に任命し、ポーランド北部ウクフの司教に任じた。しかし1259年にモンゴルがポーランドを侵攻したことで、その職務を全うすることはできなかった。1262年にはザクセンの管区長に任ぜられてマグデブルクに戻り、1272年に死去するまでその地にとどまっている。一部にはサフォーク州グランヴィル家出身の14世紀の人間とする説もある。¹⁹

表2 『事物の性質について』全19書の目次

- | |
|--|
| <p>1. 神、2. 良き天使と悪しき天使の性質、3. 魂と人体への影響、4. 人体の性質、5. 人体と四肢、6. 人間の年齢とその性質、7. 病と毒、8. 天国と天体・光と闇、9. 時間、10. 元素・火・その性質と形態、11. 空気：風、雲、降雨、雷雨、12. 鳥類、13. 水：泉・川・湖・海・魚類、14. 大地・山・その他、15. 地誌、16. 石と金属、17. ハーブと植物、18. 動物、19. 色、味覚、液体、臭気</p> |
|--|

『事物の性質について』は、1240年ごろに成立した、19書1230章から構成される作品である。²⁰ 彼自身も講師を務めていたマグデブルクのフランシスコ会系修道院の修道士たちに、聖書に登場する事物や地名についての解説を提供するために制作されたのではないかと推測されている。聖書の用語を取り上げてその内容を逐一説明するというスタイルを取っており、アリストテレスだけではなく、当時翻訳を通じてようやく知られるようになってきたヒポクラテス、テオフラストゥスなど豊富なギリシア語文献が用いられている。加えて、コンスタンティヌス=アフリカヌスのラテン語翻訳を通じてヨーロッパに伝えられたアリー=イブン=アッバス=アル=マジュシ (Ali ibn Abbas al-Majusi) の『諸術百般』<*Liber pantegni*>などのイスラーム文献、あるいは Isaac Medicus といったヘブライ系の自然科学者、医学者の著作も引用され、聖書中の言葉の語義、事物や地名、象徴的表現について丁寧な解説を加えている。

結果的にその内容は神学をはじめ論理学、心理学、医学、宇宙論、地理学、天文学、年代学、動物学、鉱物学、植物学、食物学、度量衡など多岐におよび、彼が想像以上に豊かな自然科学的知識を有していたことがうかがえる。

バーソロミューは、叙述に際して引用箇所を丁寧に紹介しており、ごく一部を除いて、その出典を確認することが可能である。それをたどることでまとめられる出典一覧は、その研究がほとんど進んでいないものの、中世自然哲学者たちの参照体系を明らかにする重要な手がかりになることが期待されている。

この作品は、文章が平易であることと、複数の写本では周縁部に多くの教訓的解釈が追記されていることから、その後は説教の際にも活用されたのではないかと想定されている。現存する写本の数は約200点と、広くヨーロッパ全域に普及しており、間違いなく中世を代表する百科全書のひとつである。中世ヨーロッパの教会、修道院、大学、そして名を知られた愛書家の図

書室には、いずれもこの作品の写本が置かれていたと言われている。²¹

特徴的なのは俗語への翻訳も数多く行われていることで、1372年に王令によってラテン語からフランス語への翻訳が行われたのを皮切りに、1398年の英語訳のほか、スペイン語、オランダ語、イタリア語、プロヴァンス語訳も制作されている。シェイクスピアをはじめとするエリザベス朝の作家達に科学的知識を提供した書物でもあった。パリの国立図書館には18点の写本が所蔵されているが、フランス語版に関しては最終的に8種類の翻訳が確認されている。これらは全て『事物の性質について』の全体訳である。前述したヴァンサン『大いなる鑑』にもフランス語版はあるが、それは全体の一部である『歴史の鑑』のみを対象としたものであった。このことから、「中世において最も人気を博した百科全書」という栄誉は、ヴァンサン『大いなる鑑』ではなくこの著作に与えられるべきであるとの主張もみられる。

その主張を裏付けるように、バーソロミューの著作は印刷物としても人気があった。1472年にドイツのケルンで最初の印刷本が刊行されて以来、少なくとも1500年までに14回も印刷に付され、1601年にフランクフルトで行われたのが最後の印刷である。しかしこの1601年版についても1609年にその重版が出されている。

さて、残る二書は、ともにアルベルトゥス=マグヌスの薫陶を受けた二人のドミニコ会士の手で記されている。1241年にパリ大学の神学教授となったアルベルトゥスは、彼自身は百科全書と呼ぶ単一の著作を残してはいないものの、当時次々とラテン語化されたアリストテレスの自然学関係の著作に依拠しながら、動植物、鉱物にかんする知識を体系化する著作を書いた。その圧倒的な影響力のもと、以下の二書は生み出されている。

まず『事物の本性について』<*De naturarum*>であるが、その著者トマ=ド=カンタンプレ (Thomas de Cantimpré/1201–1272年)の活動

域は、ブラバント、ドイツ、フランスと広範囲に及んでいる。ブラバント伯領内に生まれた彼は、5歳の時にリエージュで学問をはじめ、そのままこの地で11年間を過ごした。16歳の時にカンタンプレ修道院に入って修道士となり、その後は10年以上司祭職を務めている。

しかし1232年にルーヴェンの聖ドミニコ修道会に移ると、翌年にはケルンに送られ、ここでアルベルトゥス＝マグヌスの指導のもとで神学研究に励む。ケルンで四年間過ごした後（1237年）、再びパリで学び、1240年にルーヴェンに戻ると、哲学と論理学の教授となっている。彼は学者としてばかりではなく、説教師としても人気を博しており、「大説教師」の称号も得ている。

もちろん彼の名は著述家としてよく知られており、合計7点の作品が現在に伝えられているが、そのなかで最初の、そして最も普及したのが、ルーヴェンに戻ってから著した『事物の本性について』である。20書におよぶこの著作の執筆に、彼は15年を費やしている。その構成は表3の通りである。

表3 『事物の本性について』全20書の目次

- | |
|--|
| <p>1. 人体の造り、2. 魂とその力、3. 怪物、4. 四つ足獣、5. 鳥類、6. 海獣、7. 魚類、8. 蛇、9. 虫、10. 木全般、11. 栽培された木、12. ハーブ全般とその医学的利用、13. 泉、14. 宝石とその力、15. 七つの金属（金、銀、鉄、銅、錫、鉛、水銀）、16. 大気：七つの地域・大気の湿度、17. 天体と七つの惑星、18. 天気、19. 元素、20. 星と惑星・食（後世の追加）</p> |
|--|

ここでは、世界の事物について百科事典的な説明を施しながらも、個々の存在が道徳的にどのような意味を有しているのか、という点についての言及が数多く確認されている。これは先に紹介してきたアレクサンダーやアルノルドゥスに共通する。その序文において、著者はこの

作品がドミニコ会の説教師向けの著作であることを明言している。この作品には数多くの写本が制作、保存されており、現存する写本は150点以上（部分写本を含む）、またその多くが14世紀までに制作されている。

彼にはこの他 <Bonum universale de apibus> と呼ばれる著作も知られている。これは蜂とその巣を比喩に用いて、統治の枢要、たとえば支配する者とその支配に服する者の義務について論じている。この作品は人気となり、その数世紀間普及し、15世紀末から16、17世紀にかけて印刷も行われている。残りの著作はすべて聖人伝である。²²

最後にとりあげるのは、ヴァンサン＝ド＝ボーヴェ（Vincent de Beauvais/Vincentius Bellovacensis/c.1190–1264）²³ が1247年から1259年にかけて、幾度も筆を加えながら完成させた『大いなる鑑』<Speculum maius>である。この作品は、もともと四部構成が考えられていたが、当初は『自然の鑑』<Speculum naturale>、『諸学の鑑』<Speculum doctrinale>、『歴史の鑑』<Speculum historiale>の三部のみが制作された。彼の死後に『道徳の鑑』<Speculum morale>が追加されるが、全80書、9885項目、約650万語に上るきわめて浩瀚な著作であり、450名の著者による、およそ2000点の著作が引用されている。²⁴

そうした膨大な著作であるにもかかわらず、これまで紹介してきた全書とはやや異なって、逐次教訓的な記述をさし挟むことはない。とくに『自然の鑑』においては、古代から現在までの知識を禁欲的に紹介している。

4-3 『大いなる鑑』（第1部『自然の鑑』）の世界観・自然観

『大いなる鑑』編纂、執筆の動機について、ヴァンサンは序文で次のように記している。

「わが心はたびたび、この世へのつまらない思いや感情からいくらか離れ、できる限り理

性の高みに上って、ひと飛びで、まるでいと高きところにいるかのように、様々な生物によって満たされた無数の場所を含むこの世界全ての大いなる様を眺めている。またこの世界が経てきた年月を、その始まりから現在まで、それはまるで一本の糸のように、世代の移り変わりの中で生じてきた様々な変化をすべて含んでいるが、それをひと目で見通している。そしてそこからは、信仰の導きによって、創造者自身の偉大さや美しさ、そして永続性について考えるにいたる。」²⁵

ここでは、無数の生物に満ちた自然界について語ることが創造者である神の偉大さ、美しさ、そして永続性について考える手がかりであることが指摘されている。また、現在の自然界のあり方と、そこで生きてきた人間の営みが交差していることを指摘し、自然史と人間史への関心、すなわち歴史への関心を示している。これまで紹介してきた百科全書で、歴史をその主要素に位置づけたものはなく、ヴァンサンは独自の性を示すものとなっている。

アリストテレス自然学を余すところなく汲み取りながら、不思議なことにその序文に自然哲学と神学との緊張関係は感じられない。続く部分で彼は、本書の壮大な構想を明らかにする。

「したがって私は、この普遍的な作品を四つの主要な部分、それぞれ他と区別される四つの完全に独立した本に分けた。第一のものは完全な自然の歴史である。次のものは一連の学識に関わるものである。第三のものは道徳教育に関するものであり、四番目のものは完全な人間の歴史である。第一のものが取り扱うのは自然と事物全ての性質であり、第二のものは扱うのは全ての学問の内容とその秩序である。第三のものが扱うのは全ての徳、そして悪徳の性質とその振舞いであり、第四のものが扱うのは、全ての歴史の流れである。」²⁶

大部であるにもかかわらず、『大いなる鑑』は全体が非常によく配慮され構成された作品であることがうかがえる。『道徳の鑑』を書き上げることなく亡くなったのは残念であるが、その執筆は当初から想定されており、第三の部分を作すものであった。本書の性格を考える際には、一体のものとなしてよいであろう。

歴史への関心はヴァンサン作品の特徴であるが、それは単に『歴史の鑑』を含んでいるということにとどまらない。『自然の鑑』を含む四部分すべてが神の世界の歴史を理解するものとされているのである。歴史こそ彼の世界認識の軸を構成するものであった。

「したがって第一の部分の基礎を作すのは、創造の始まりから安息日の休息までの聖なる歴史である。ここに加えられるのが、天国と地上のあり方に関することであり、宇宙の法則、墮罪に関すること、罪の結末がそれに続く。第二の部分の基礎は、知性に基づく、墮罪した人間の回復であり、第三の部分の基礎は、慈愛による人間の回復である。第四の部分の基礎は人間の始まりからネロの統治に至るまでの聖書であり、次いでエウセビオス、ヒエロニムス、プロスペール、シゲベルト、そしてその他の年代記作者たちの年代記であり、皇帝たちによる継承を通して現在に至っている。」²⁷

自然界（あるいは自然史）について論じた『自然の鑑』とともに、ここではヴァンサンは思想的基盤をうかがわせるものとして、第2部『諸学の鑑』にも簡単に触れておきたい。²⁸

『諸学の鑑』は、中世の百科全書のなかで、中世の知と学問との関係について論じている唯一の著作である。そこでは、基礎的な学問から高度な学問へ、という順番で諸学が論じられ、最初に「まず習得されるべきものであるから」という理由で言語学が置かれる。次いで実践学として倫理学、経済学、政治学について記した後、

人工・人造学、論理学（自然哲学、数学）と続き、「最高の哲学 <summa philosophia> としての」形而上学へと至る。最後に置かれているのが神学である。リュジニャンによれば、この区分は12世紀の神学者サン＝ヴィクトルのフーゴーに倣ったものであるという。²⁹ しかしその順番は異なり（「論理学」、「実践学」、「人工・人造学」、「思弁学」の順ではなく）、基礎から高度へ、実践学から形而上的な学問へというヴァンサンが考える学問の階梯を前提としたものとなっている。

フーゴーとの比較で『諸学の鑑』の特徴をもうひとつ述べておけば、医学への強い関心があげられる。11書で取り上げられる人工・人造学は、医学の代わりに錬金術を入れていることを除けば、ほぼ全てフーゴーの分類に従っている。ちなみに医学については、その後の三書で独立して詳細に論じている。これは、医学は人工・人造学に含まれるべきか、あるいは論理学かという問題を解決するための配慮であり、その重要性に鑑みて、独自の位置を与えている。³⁰ 医学の人工・人造学的部分について12書から14書までで説明した後、15書から始まる思弁学において、論理医学は思弁学の一部をなすとしている。

ヴァンサンは、『自然の鑑』でも個々の物質の医学における用法について語っている。こうした医学へのこだわりについて、ヴァンサン自身はそれが同僚の勧めによるとしか述べていないが、医学を（論理学ではなく）実践の学として位置づけようとする意図を読み取ることは可能であろう。

さて、『自然の鑑』では人間における魂の位置づけと、人間の墮罪にとくに配慮しながら、自然界に存在するおよそあらゆる全てのものを記している（表4参照）。

表4 『自然の鑑』全32書の目次（第一次改訂後）

1. 神と天使、2. 元素・光・色・悪魔、3. 天国、
4. 火、空気（風・雲・降雨・雷雨・臭気）、5.

水、6. 大地、7. 鉱物、金属およびその医学的利用、8. 石全般と宝石、9. 植物、10. 栽培されたハーブ、11. 種子、穀物、ハーブ液、12. 森や草原の木全般、13. 栽培木とそこから取れる食用果物、14. 果樹とその実から作られるジュース、15. 天体、天宮、時間、16. 鳥類について：特性、種類、その医学的利用、17. 魚類と海獣について：種類とその医学的利用、18. 家畜化された四肢動物：種類とその医学的利用、19. 野生の四肢動物：種類とその医学的利用、20. 蛇・は虫類・虫・昆虫、21. 動物一般の性質、22. 動物：食物・動作・成長、23. 人間の魂、24. 魂の諸力：性質・生命・獣、25. 魂の知覚力、26. 肉体に対する魂の支配、27. 人間の魂の力、28. 人体および四肢の構成、29. 安息日と神の偏在、30. 元々の状態と墮罪、31. 墮罪以後の人間、32. 地球における居住可能な場所とアダムから世の終わりまでの人類の短い歴史

全32書からなる『自然の鑑』の全体構成にはひとつの特徴がある。歴史感覚に鋭く、時系列的配置に関心を持つヴァンサンは、当時としては例外的な、聖書『創世記』に記された順番に沿って、事物を配置している。³¹ 他の百科全書作者、たとえばバーソロミュー（バルトロマエウス）とトマは、何よりもまず人間について最初に論じていた。他の生物は、最も高等な人間から下等なものへ、という順番である。またアルノルドゥスは宇宙から論じているが、これは天上と地上との対比を意識したものであり、ヴァンサンとは異なっている。

こうした配置をとることで、自然界の、神の被造物としての性格は一層際立つこととなる。しかし天使と悪魔の関係性、あるいは石や鉱物といったものについては創世記に明確な記述がないため、構成に苦慮している様子もうかがえる。改訂時では、当時の神学的な議論も踏まえて、その順序を入れ替えている。³² すなわち、

発表時は冒頭数書の構成が、1 神、2 光と天使、3 天国、火、降雨、悪魔となっていたが、その後第一次改訂時に、表4に見るように、神と天使を合わせる一方で、天国に独立した一書を割くが、順番としては天国よりも先に、悪魔について論じることになっている³³

もともとヴァンサンは、聖書の記述順に常に忠実であろうとしているわけではない。たとえば魚と鳥について記述するとき、イシドルスなどは聖書にしたがって魚について先に説明している。³⁴しかしヴァンサンの作品では、同時代の他の百科全書と同様に、鳥を先に記している(表4参照)。理由は詳らかにはないが、これらを例外としつつも、基本的に体系化の基準は『創世記』であったといえるだろう。

『自然の鑑』は膨大な作品であり、250フォリオからなる分冊4つ分の分量を有している。したがって、ほとんどの写本はその部分にとどまる。しかしヴァンサンは、序文だけにとどまらず、具体的な個々の叙述に際しても、自らの長大な作品のバランスに意を砕いている。各部のなかには他部の要約が記されるとともに、各書においては、そこに含まれる章のタイトル一覧を付すという手法をとっている。こうしたやり方はパーソロミューも用いていた。さらに、各章のはじまりには、数語でその概要を記しており、最終改訂版には、アルファベット順の索引まで付されている。³⁵

読者の便宜を考えたこうした周到な配慮は、パーソロミューやトマ、あるいはアルベルトゥスの作品などにも確認されるが、詳細な索引をアルファベット順に作成するのはドミニコ会士の作法であった。彼らはいち早く聖書の詳細なコンコーダンスを作成し、検索の便を考えてそれをアルファベット順に並べていたことが知られている。アルベルトゥスやトマとともにヴァンサンも、ドミニコ会の学問的環境のなかで習得したこの整理法を、自らの作品で実践したと思われる。

このように、同時代の他の百科全書と比較し

て、『大いなる鑑』は、その全体性と体系性において傑出していた。とりわけ『自然の鑑』に顕著なように、対象の選択とその体系化はラテン=キリスト教的世界観に準拠したものであった。『自然の鑑』そのもののなかに教訓的側面が弱いとしても、全体の一部をなす『道徳の鑑』は、「慈愛による人間の回復」を目的として、「全ての徳、そして悪徳の性質とその振舞い」を論じている。

したがって『自然の鑑』を含む『大いなる鑑』は、同時代の自然科学的知識をまさにキリスト教的に解釈し実践する、すぐれて実用的な作品であったとすることができるだろう。

しかしその壮大な構想と編纂意図が同時代において十分に受け入れられたかは疑問である。

『大いなる鑑』の現存する写本は、その数が特定されていないものの、300点ほどと推定されている(部分含む)。多くはシトー系の修道院内図書館に所蔵されており、フランシスコ系、ドミニコ系は少ない。さらに写本の大部分は『歴史の鑑』のみの写本で、『大いなる鑑』全体が完全な形で記録されているのはわずか2点である。『自然の鑑』に関しては、ほぼ完全な形で現存している写本は25部である。その普及度は、パーソロミューだけではなく同じドミニコ会士であるトマの著作も下回っていた。

5. おわりに

試みにアリストテレス、アルベルトゥス、トマス、そしてヴァンサン四者の著作リスト、あるいは著作の内容構成を並べてみよう(表5~7、および表4を参照)。トマスは、たしかにその膨大な著作を通じてアリストテレス思想の受容に積極的であったが、それは『天体論』や『気象論』を除けば、ほとんどが論理的著作に限定されていた。いわゆる自然学的著作については、カトリック教会の立場を代弁してきわめて禁欲的である。それに対して彼の師であったアルベルトゥスは、貪欲なまでにアリストテ

レスの思想全体を吸収しようと試みている。その姿勢を忠実に継承しているのは、トマスよりもむしろヴァンサン＝ド＝ボーヴェの方ではなかったかと思えてくる。

13世紀カトリック教会の自然観は、ともにドミニコ会士であったアルベルトゥス＝マグヌス、トマス＝アクィナス師弟によって練り上げられていったという印象が強い。しかし彼らの活動

は、同時期に同じドミニコ会士として活動していたトマ＝ド＝カンタンプレやヴァンサン＝ド＝ボーヴェ、そしてアルベルトゥスもまた一編者として参加していた中世百科全書編纂運動と重なり合う部分が多かった。したがって、トマスの科学観と並んでアルベルトゥス＝マグヌスからトマ＝ド＝カンタンプレを経てヴァンサンへと流れ込む科学思想もまた、ルネサンス期にむ

表5 アリストテレス著作一覧

『範疇論』<Categoriae>、『命題論』<De Interpretatione>、『分析論前書』<Analytica Priora>、『分析論後書』<Analytica Posteriora>、『トピカ』<Topica>、『詭弁論駁論』<Sophistici Elenchi>、『自然学』<Physica>、『天体論』<De Caelo>、『生成消滅論』<De Generatione et Corruptione>、『気象論』<Meteorologica>、『魂について』<De Anima>、『自然学小論集』<Parva Naturalia>、『動物誌』<Historia Animalium>、『動物部分論』<De Partibus Animalium>、『動物運動論』<De Motu Animalium>、『動物進行論』<De Incessu Animalium>、『動物発生論』<De Generatione Animalium>、『形而上学』<Metaphysica>、『ニコマコス倫理学』<Ethica Nicomachea>、『エウデモス倫理学』<Ethica Eudemia>、『政治学』<Politica>、『弁論術』<De Arte Rhetorica>、『詩学』<De Arte Poetica>、『アテナイ人の国家』<Atheniensium Respublica>、『断片集』<Fragmenta>、『宇宙論』<De Mundo>*、『氣息について』<De Spiritu>*、『小品集』<Opuscula>*、『問題集』<Problemata>*、『大道德学』<Magna Moralia>*、『徳と悪徳について』<De Virtutibus et Vitiis>*、『経済学』<Oeconomica>*、『アレクサンドロスに贈る弁論術』<Rhetorica ad Alexandrum>*

*印は偽書とされるもの。

表6 アルベルトゥス＝マグヌス著作一覧

『自然学』<Physica>、『天空と世界について』<De caelo et mundo>、『場所の本性について』<De natura loci>、『諸元素の特性の原因について』<De causis proprietatum elementorum>、『生成と消滅について』<De generatione et corruptione>、『気象について』<Meteara>、『鉱物について』<De mineralibus>、『靈魂について』<De anima>、『自然学小品集』<Parvanaturalia>、『栄養吸収について』<De nutrimento>、『感覚について』<De sensu et sensato>、『記憶について』<De memoria>、『知性と被知覚物について』<De intellectu et intelligibili>、『睡眠と覚醒について』<De somno et vigilia>、『精気と呼吸について』<De spiritu et respiratione>、『動物の運動について』<De motibus animalium>、『若さと老齢について』<De juventute et senectute>、『生と死について』<De morte et vita>、『植物について』<De vegetabilibus>、『動物について』<De animalibus>、『靈魂の本性と起源について』<De natura et origine animae>、『進行運動の原因について』<De principiis motus processivi>、『形而上学』<Metaphysica>、『諸原因と宇宙の展開について』<De causis et processu universitatis a prima causa>

表7 トマス=アキナス著作一覧

『イザヤ書注解』<Expositio super Isaiam ad litteram>、『命題集注解』<Scriptum super libros Sententiarum>、『存在者と本質について』<De ente et essentia>、『真理についての定期討論集』<Quaestiones disputatae de veritate>、『随時討論集』<Quaestiones de quolibet>、『ボエティウス「三位一体論」注解』<Super Boetium De Trinitate>、『対異教徒大全』<Summa contra Gentiles>、『ヨブ記注解』<Expositio super Iob ad litteram>、『黄金連鎖』<Glossa continua super Evangelia>、『神名論注解』<Super librum Dionysii de divinis nominibus>、『神学大全』第一部～第三部<Summa Theologica>、『能力についての定期討論集』<Quaestiones disputatae de potentia>、『魂についての定期討論』<Quaestio disputata de anima>、『靈的造物についての定期討論』<Quaestio disputata De spiritualibus creaturis>、『神学要綱』<Compendium theologiae>、『デ・アニマ注解』<Sententia Libri De Anima>、『マタイ福音書注解』<Lectura super Matthaum>、『ヨハネ福音書注解』<Lectura super Ioannem>、『悪についての定期討論集』<Quaestiones disputatae de malo>、『徳についての定期討論集』<Quaestiones disputatae de virtutibus>、『<感覚と感覚されるもの>注解』<Sententia Libri de sensu et sensato>、『自然学注解』<Sententia super Physicam>、『気象学注解』(2書5章まで)<Sententia super Meteora>、『命題論注解』(2書2章まで)<Expositio Libri Peryermenias>、『分析論後書注解』起筆<Expositio Libri Posteriorum>、『倫理学注解』<Sententia Libri Ethicorum>、『政治学注解』(3書6章まで)<Sententia Politicorum>、『形而上学注解』<Sententia super Metaphysicam>、『原因論注解』<Super Librum de causis>、『知性単一説論駁』<De unitate intellectus contra Averroistas>、『世界の永遠性について』<De aeternitate mundi>、『離在実体について』<De substantiis separatis>、『パウロ書簡注解』<Expositio et Lectura super Epistolas Pauli Apostoli>、『詩篇注解』(54篇まで)<Postilla super Psalmos>、『天体論注解』(3書冒頭まで)<Sententia super librum de caelo et mundo>、『生成消滅論注解』(1書5章まで)<Sententia super libros de generatione et corruptione>

けた自然哲学のその後の展開に大きな役割を果たしていた可能性がある。

このような見通しを確かめるためには、今回の概観を踏まえ、『大いなる鑑』をはじめとする中世百科全書の具体的な内容や構成について、さらに分析を深める必要があるだろう。具体的には、カトリック世界の百科全書と、ヘブライ系、イスラーム系の百科全書群との関係性、あるいは個々の百科全書編纂時数度に行われた数度に及ぶ改訂作業の意味、などが重要な論点になると思われる。かかる作業を経て、ヨーロッパにおける中世的自然観の成り立ちについて具体的な像を得ることができたとき、そのルネサンス的展開の具体的な過程に取り組むことが可能になるとと思われる。

注

- 1) 『IPCC第4次評価報告書 統合報告書 政策決定者向け要約』(日本語翻訳版), 2007年(文部科学省・気象庁・環境省・経済産業省), 5頁。英国イーストアングリア大学の気候研究ユニットから盗難されたメールの内容により、この報告書で示された科学的知見の客観性に対して疑問が広がったが、2009年12月、IPCCは報告書の信頼性は揺るぎないとする反論を行っている。なおIPCCは、2013年もしくは2014年に第5次評価報告書の提出を予定している。
- 2) ディープ・エコロジー論の提唱者であるアーネ=ネスをはじめとする、北欧独自の環境思想をその歴史的背景に遡って分析した最近の著作として、尾崎和彦『ディープ・エコロジーの原

- 郷—ノルウェーの環境思想』東海大学出版会、2006年。アーネ＝ネスの著作の邦訳としては、アーネ＝ネス（斎藤直輔・開龍美訳）『ディープ・エコロジーとは何か—エコロジー・共同体・ライフスタイル—』文化書房博文社、1997年。
- 3) カルロス＝スティール「学の対象としての自然—自然科学に対する中世の寄与—」小山宙丸編『ヨーロッパ中世の自然観』創文社、1998年、187-220頁。
 - 4) 樺山紘一「ヨーロッパの自然観・身体観」『シリーズ世界史への問い 1 歴史における自然』岩波書店、1989年、229-253頁、特に232-238頁。
 - 5) Pierre Duhem, *Le système du monde. Histoire des doctrines cosmologiques de Platon à Copernic*, Paris, 1913.
 - 6) E.グラント（小林剛訳）『中世における科学の基礎づけ その宗教的、制度的、知的背景』知泉書館、2007年（以下、E.グラント『中世における科学』と略記）。
 - 7) リチャード＝ルーベンスタイン（小沢千恵子訳）『中世の覚醒—アリストテレス再発見から知の革命へ—』紀伊国屋書店、2008年。
 - 8) 両論文とも、Harvey, S.(ed.), *The Medieval Hebrew Encyclopedias of Science and Philosophy: Proceedings of the Bar-Ilan University Conference (Amsterdam Studies in Jewish Thought 7)*, Dordrecht/Boston/London, 2000（以下、*Medieval Hebrew Encyclopedias* と略記）に収められている。
J.B.Voorbij, Purpose and Audience: Perspectives on the Thirteenth-Century Encyclopedias of Alexander Neckam, Bartholomaeus Anglicus, Thomas of Cantimpré and Vincent of Beauvais, *Medieval Hebrew Encyclopedias*（以下、J.B.Voorbij, Purpose and Audience と略記）, pp.31-45; Eva Albrecht, The organization of Vincent of Beauvais' *Speculum Maius* and of some other latin encyclopedias, *Medieval Hebrew Encyclopedias*,（以下、Albrecht, The organization と略記） pp.46-57.
 - 9) Paul Edward Dutton(ed.), *The Glosae super Platonem of Bernard of Chartres*, Toronto, 1991.
 - 10) いわゆる「シャルトル学派」に関する研究史については、甚野尚志『十二世紀ルネサンスの精神 ソールズベリーのジョンの思想構造』知泉書館、2009年。
 - 11) 伊藤俊太郎『12世紀ルネサンス』岩波書店、1993年。
 - 12) E.グラント『中世における科学』23頁。
 - 13) E.グラント『中世における科学』32頁。
 - 14) J.B.Voorbij, Purpose and Audience, p.31.
 - 15) Alexander Neckam (Thomas Wright [ed.]), *De naturis rerum libri duo: with the poem of the same author. De laudibus divinae sapientiae*, Longman, 1863.
 - 16) J.B.Voorbij, Purpose and Audience, pp.36-37.
 - 17) Alexander Nequam (Rodney M.Thomson [ed.]), *Speculum Speculationum (Auctores Britannici Medii Aevi)*, Oxford University Press, 1988.
 - 18) Albrecht, The organization, pp.46-47.
 - 19) 後世になって修理が施されたと思われる本書の背表紙には長い間、彼の別名と信じられていた「Glanvilla」という人名が記されているが、最近ではこの名前の信憑性が疑問視されるようになってきている。
 - 20) ウィクリフによる英語訳聖書にも関わったことが知られるイングランドの学者 John Trevisa も、この著作の翻訳に携わっている。M. C. Seymour(ed.), *John De Trevisa, De Proprietatibus Rerum: A Critical Text*, Oxford University Press, 1988.
 - 21) *Ibid.*, pp. 262-63
 - 22) <Vita Christinae virginis mirabilis dictae>, <Vita B. Margaritae Iprensis>, <Vita Pia Lutgardia>, <Vita Joannis abbatis primi monasterii Cantimpratensis et ejus Ecclesiae undatoris>, <Supplementum ad vitam B. Mariae d'Oignies a B.M. Jacobo de Vitriaco.>
 - 23) デイドロヤダランバールに代表される、18世紀フランスのいわゆる「百科全書派」ではなく、ヴァンサンをはじめとする「中世の百科全書派」に関して、わが国ではほとんど研究されていない。ヴァンサン＝ドボーヴェ『大いなる鑑』に関しては、清瀬卓「『鑑』:中世百科全書研究ノート」『イタリア学会誌』31巻、1982年、116-127頁を参照。またバルトロマエウス＝アングリ

クスに関しては、谷川かおるの次の二点の論考がある。「バルトロマエウス・アングリクス著『事物の特質について』：オック語ヴァージョン校訂ノート(1)』『東京都立大学仏文論叢』第11号、1999年、73-88頁、「バルトロマエウス・アングリクス著『事物の特質について』：オック語ヴァージョン校訂ノート(2)「猫について」『論集(駒沢大学外国語部)』56巻、2002年、111-127頁。

- 24) 『知識の鑑』の現存する写本については、ARLIMA (<http://www.arlima.net/index.html>) を参照。ここには詳細な研究文献リストも掲載されている。加えて、写本情報を含む詳細な研究情報が、フォールバイが作成したサイト (<http://www.vincentiusbelvacensis.eu/>) やナンシー第二大学 Atelier Vincent de Beauvais のサイト ([http://www.univ-nancy2.fr/MOYENAGE/Vincent de Beauvais/Bibliographie.html](http://www.univ-nancy2.fr/MOYENAGE/Vincent%20de%20Beauvais/Bibliographie.html)) で公開されている。
- 25) <Ipsa namque mens plerumque paululum a prefatis cogitationum et affectionum fecibus se erigens et in specula rationis ut potest assurgens quasi de quodam eminenti loco totius mundi magnitudinem uno ictu considerat, infinita loca diversis creature generibus repleta intra se continentem, eum quoque totius mundi videlicet a principio usque nunc uno quodam aspectu nichilominus conspicit, ibique tempora omnia diversas per generationum successiones rerumque mutationes continencia quasi sub quadam linea comprehendit et inde saltem intuitu fidei ad cogitandum utrumque creatoris ipsius magnitudinem, pulchritudinem atque perpetuitatem ascendit. Libellus apologeticus>SH (Dijon BM 568, 1244) CHAP 5 APOLOGIA DE NATURA RERUM ET HISTORIA TEMPORUM (V). なお、以下 Speculum Maius からの引用は、全て Atelier Vincent de Beauvais の電子テキストデータベースによる。
- 26) <Quapropter ipsum opus universum in quatuor partes principales tanquam in quatuor volumina perfecta, et a se invicem separata distinxit, quarum una continet totam hystoriam

naturalem, alia vero totam seriem doctrinalem, tertia vero totam eruditionem moralem, quarta totam hystoriam temporalem. Prima siquidem prosequitur naturam et proprietatem omnium rerum. Secunda vero materiam et ordinem omnium artium, tertia vero proprietates et actus omnium virtutum, ac viciorum, et quarta seriem omnium temporum.>Apologia totius operis SH (Douai BM 797, version quadrifaria), VII, CHAP 16 DE QUADRIFARIA DIVISIONE TOCIUS OPERIS.

- 27) <Igitur prime partis fundamentum est historia sacra ab ipso principio creationis rerum usque ad requiem Sabbati, cui etiam diffusius interseruntur ea, que pertinent ad naturam celi et mundi, et postmodum adicitur de ratione universi et hiis, que pertinent ad ruinam vel sequelam peccati. Fundamentum secunde partis est hominis lapsi reparatio quantum ad intellectum, et fundamentum tertie partis eiusdem reparatio quantum ad affectum. Fundamentum quarte partis est primo quidem sacra scriptura a generatione primi hominis usque ad imperium Neronis. Inde vero cronica Eusebii, Ieronimi, Prosperi, Sigiberti ac ceterorum cronographorum per successiones imperatorum usque ad diem istum.> Prologus sive libellus actoris apologeticus totius operis SN (Bruxelles BR 18465, version bifaria 1244) pr04 CHAP 17 DE BIFARIA DIVISIONE TOTIUS OPERIS (XVII).
- 28) 『歴史の鑑』の基本的構成、数度に及ぶ改訂とその意味については、拙稿「中世フランス王国の歴史・国家・世界観—『歴史の鑑』と『フランス大年代記』—」森田武教授退官記念会編『近世・近代日本社会の展開と社会諸科学の現在』新泉社、2007年、475-495頁。
- 29) フーゴーは、『学習論—読解の研究について—<Didascalicon de studio legendi>』のなかで哲学を4つに分け、「論理学」には論理学、数学、物理学、自然哲学を、「実践学」には倫理学、経済学、政治学を、「人工・人造学」には、模造学、軍事学、商学、農学、狩猟学、医学、演劇学を、そして最後に「思弁学」を挙げている。

- この四区分はすでにアリストテレスにも見られ、必ずしも独創的なものではないが、プラトン・アウグスティヌス的な哲学思想が浸透していた12世紀段階において、こうした考え方をいち早く示したことは画期的であった。<Didascalicon>については、C.H. Buttmer(ed.), *Hugonis de Sancto Victore Didascalicon De Studio Legendi. A Critical Text*, Washington, D.C., 1939. 邦訳として五百旗頭博治, 荒井洋一訳「ディダスカリコン(学習論)—読解の研究について」上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 9 サン=ヴィクトル学派』平凡社, 1996年, 25-199頁。
- 30) <liber duodecim agit de practica medicanae, quae, et ipsa inter mechanicas reputatur eo, quod operatione munuum exercetur> *Speculum doctrinale*, indices, bro; <Quintus-decimus liber agit de physica, idest de naturali philosophia, cuius species quedam, siue pars est ipsa medicinae theorica.> *Speculum doctrinale*, indices, b 3 ro
- 31) 13世紀前半に成立した百科全書のなかでは、モンテ=サクロのグレゴリウスによる『人間の神聖化について <Peri ton anthropon theopoiēseos>』がヴァンサンと同様の構成をとっているが、こうした例はごく僅かである。Eyvind, Ronquist, *The Early-Thirteenth-Century Monastic Encyclopedia in Verse of Gregorius de Monte Sacro*, *Studi Medievali*, vol. 29, no2, 1988, pp. 841-871; Christel Meier, *Organisation of Knowledge and Encyclopedic ordo: Function and Purposes of a Universal Literary Genre*, Paul Binkley(ed.), *Pre-Modern Encyclopedic Texts: Proceedings of the Second Comers Congress, Groningen, 1-4 July 1996*, Brill, 1997, pp. 103-126.
- 32) Irene Backus, *Some Remarks on the Theology of Vincent of Beauvais' Speculum naturale. Two Versions of the Treatise on Angels (ca.1240-1256/59)*, Anny Raman, Eugène Manning(ed.), *Micellanea Martin Wittek. Album de codicologie et de paléographie offert à Martin Wittek*, Louvain, 1993, pp.16-26.
- 33) 二つの版の相違とその意味については、Monique Paulmier-Foucart, *Etude sur l'état des connaissances au milieu du XIIIe siècle: Nouvelles recherches sur la genèse de Speculum maius de Vincent de Beauvais*, *Spicae*, 1, 1978, pp. 91-122.
- 34) 『語源』第12書, 6章「魚について」, 第12書, 7章「鳥について」. イシドルスの <Etymologiarum> については, Jacques Fontaine, *Isidore de Séville et la culture classique dans l'Espagne wisigothique*, Paris, Études augustiniennes (Collection des études augustiniennes. Série Antiquité, 100-102), t.3, 1959(1 éd.), 1983(2 éd.). また最近のものとしては, Stephen Barney, W. J. Lewis, J. A. Beach, *The Etymologies of Isidore of Seville*, Cambridge University Press, Cambridge, 2006. 邦訳(部分)としては, 兼利琢也訳「語源」上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』平凡社, 1993年, 505-565頁。
- 35) Albrecht, *The organization*, p.56.
- (2010年3月31日提出)
(2010年4月16日受理)